

Contents

国際エイズ会議をめぐって	1
Living Together 計画 始動!	6
新人合同研修会終了	9
青年海外協力隊エイズ専門研修	11
活動報告	13
お知らせ	16

第15回国際エイズ会議をめぐって

7月11日から16日にかけてタイのバンコクで行われた第15回国際エイズ会議を、コミュニティのそれぞれの視点からレポートしてもらいました。

「女性とエイズ」	兵藤 智佳
「国際エイズ会議での当事者参加～神戸に向けて～」	山口 一夫
「Community Project グローバルビレッジの会場から」	李 祥任
「HIVとお金をめぐって」	吉田 成美
「トランスジェンダーとHIV」	東 優子
「戸惑いの1週間～Access for allの叫び声を眼前にして」	大内 幸恵
「『Access for all』：ある物語の終焉?」	アフリカ日本協議会 稲場 雅紀

●「女性とエイズ」

兵藤 智佳

「女性とエイズ」について何かが語られる際、「女性が女性の問題とどう向き合うか」という視点が強く押し出されるように感じます。しかし、HIVと女性の問題は、「女性の問題」ではありません。HIVに関わるすべての事柄において、「女性と男性の間に存在する力関係の不平等がどう影響を与えるのか」、「その不平等を解消するためには何が必要か」ということなのだと思います。

そうした意味で、今回の国際エイズ会議で私が一番印象に残ったのは、ジェンダー関連のセッションでの発表ではなく、「アジアのリーダーたちに出会う」というセッションでのあるアジア女性陽性者のスピーチでした。このセッションの発言者は、国連関連、中国保健大臣、東チモールの独立でノーベル平和賞を受賞したジョセ・ラモス氏らの、そうそうたるアジアの男性リーダーたちです。保健大臣に続き3番目に発言したこの女性は、自信に満ちた態度で自らをHIV陽性者の活動家と名乗り、こう述べました。「このようなリーダーたちがそろった席で、私が発言できることを光栄に思う。しかし、この場において女性陽性者の私の発言がなぜ一番最初ではないのか。それを考える必要がある。」この発言で会場は一瞬、ドキリとさせられました。そして、その後、彼女は、「でも、今回は私の後にノーベル賞受賞者の発表があるので、まあいいとしたい。」と笑いを誘ったのです。

これらは、なんとなくあたまとされ、私たちに刷り込まれてい

る「序列」に対する彼女の「痛烈な批判」です。世界の男性リーダーに向かってユーモアを交えて力関係を意識化させ、変化を求める発言に、私は感動すら覚えました。その後のラモス氏のスピーチでは、「彼女のあとで僕には何もいうことがない」と言ったのも象徴的でした。

社会的に弱い立場におかれる女性が、互いに支援しあって困難を乗り越えていく重要性は、いうまでもないと思います。しかし、HIVの当事者である女性は、「被害者」、「弱者」だけではありません。男性を中心としてつくられてきた不平等な社会に対して「変革」をもたらす力を持っていることを再認識したいものです。幸い、国連エイズ合同計画は、2004年のテーマを「女性とエイズ」にしています。発言や行動の機会は存在しています。私たちひとりひとりが何に気づき、誰の声をどう聞けるのか、考え続けたいと思いました。

●「国際エイズ会議における当事者参加～神戸に向けて～」

山口 一夫

PWA ラウンジ

あらゆる種類のHIV/AIDSに関する集まりにおいて、「当事者である陽性者が参加すること」が集まりを意義あるものにするための必須の条件である。国際エイズ会議においては、PWA (HIV陽性者)ラウンジを設けることにより、陽性者が安心して参加できる特

別な空間を用意している。あらゆる背景を持つ陽性者が例外なく参加できることが、集まりを成功させるための鍵だからである。バンコク会議のPWAラウンジは「すばらしい」の一言に尽きた。来年の神戸ICAAPにおいて、私たちも同様に「全ての陽性者が安心できる空間」を提供したいものだ。

前回のバルセロナ会議では、PWAラウンジはだっ広い仕切りのない空間で、長机に折畳式椅子が並んでいて「学食みたいで落ち着かない」と評判が悪かった。また、出入口の目の前に銀行の出張所が設けられて現金の引き出し・両替のための長い行列ができていたため、プライバシー保護の観点からも問題があった。また、会場の目立つところに手書きの「PWAラウンジはこちら」という表示が張られ、その方向へ歩いていく者は陽性者しかおらず、感染を公表していない私は人目を気にしてラウンジを利用することとなった。

今回のバンコク会議ではPWAラウンジの会場内の配置も、一般の参加者はあまり来ないところではあるが、グローバル・ビレッジ(主に地域コミュニティに根を張って活動している団体が出店・催事を行っている場所)に比較的近い場所に位置しており、配置の段階からPWAラウンジ委員会が積極的に会議運営にかかわっていることが感じられた。

PWAラウンジは、さらにラウンジとカフェテリアに分けられていた。この2つのエリアは床から天井まである壁で仕切られていて、食堂として機能するカフェテリアの喧騒が、ラウンジエリアには聞こえてこない構造になっている。

カフェテリアの特記すべき点は食事がバラエティに富んでいて、あらゆる食事制限(宗教・慣習・健康上)に対応できていた点である。ホットランチコーナーでは炊き立てのご飯と日替わり2種類(例:魚のカレーと中華風厚揚げ入り野菜炒め等)が、ランチボックスコーナーではさまざまなランチボックス(例:タイ焼そば・タイ焼飯・スパゲッティミートソース・ベジタリアン用野菜サラダ・ベジタリアン用野菜炒め・オムレツ等)が毎日提供されていた。その他に、パンコーナー・山積みのお新鮮な果物・乳製品・お菓子スタンド、そして飲み物も豊富にあった。

ラウンジエリアは、応接・休憩室・医務室・マッサージルーム・洗面施設などからなっている。タイ風の落ち着いたインテリアで飾られていて、様々なタイプの椅子・机が配置されており、大人数でも、少人数でも、打ち合わせ・歓談に適当な場所を見つけることができるよう工夫されていた。また、横になって本を読んだり休憩をとったりできるように、タイ式の枕つきゴザが並んでいるスペースもあり、上掛をかけて眠ることができるようになっていた(ただし、冷房が非常に強かったようで、ある韓国の陽性者は風邪をひいてしまい、会議期間中最後まで鼻水を押さえるのに苦労していた)。また、タイ式マッサージは予約制で非常に人気があり、私は予約が入らず残念なことをしてしまった。

日本においてはコミュニティ活動に携わっている陽性者・団体の絶対数が非常に少ないことを考えると、神戸ICAAPにおいてバンコク会議と同等のサービスを提供することは困難であろう。しかしながら、豪華ではなくてもいいから、PWAラウンジに本来備わっているべき機能を明確にして、最低限それを提供したいものだ。

NGO ブース

展示会場(ブースエリア)は2分の一が製薬会社等による有料商業ブースエリア、4分の一が各国政府・国際NGO等による有料GO/NGOブースエリア、4分の一が無料NGOエリアだった。今回の無料NGOブースエリアには申し込みが非常に多く、日本からブースを他の団体とシェアをせずにもらえたのは、JaNP+・ICAAP神戸・財団法人エイズ予防財団だけであった。今回の無料NGOブースエリアでは、一般的な目的を掲げた陽性者支援団体の出店は減って、陽性者自身による団体(JaNP+も含まれる)・陽性者の所得獲得/就業支援団体等の、陽性者の「自立」を支援する団体の出店が増加していた。これも「3パイ5」(2005年までに300万の人達が抗HIV薬を飲めるようにするという計画)により開発途上国においても抗HIV薬を入手できる可能性がでてきたため、陽性者に対する支援の種類・質が変化してきた現われであろう。

しかしながら残念なことに、せっかく無料ブースがもらえたのに資金繰りがつかず参加できずに空きスペースになっているところもあった。また、UNAIDSやWHOにも負けないぐらいすばらしい装丁のパンフレットをコンテナいっぱいにもってきたにもかかわらず、その内容が乏しくて誰もパンフレットを取っていく者がおらず全部廃棄するという、アメリカの支援を受けているあるアフリカのNGOなどは、会期中からブースには誰もいなくなってしまった。神戸ICAAPにおいてはNGOブースの選定に十分気をつけてもらいたいものだ。

●「Community Project グローバルビレッジの会場から」 シェア(国際保健協力市民の会) タイエイズプロジェクト 李 祥任

このCommunity projectは‘Access for All’というカンファレンステーマにちなんで、本会議の出席者(=会議参加費を支払った参加者など)だけでなくHIV陽性者や一般市民など、幅広いコミュニティの参加を通し、カンファレンスがよりコミュニティを包括することを目的につくられました。このプロジェクトのもと、芸術・文化プログラムや若者の活動が実施され、グローバルビレッジ会場やHIV陽性者のラウンジ、NGO展示ブースなどが設けられました。グローバルビレッジは、高額な会議の参加費を支払えなくても、誰でも無料で入場できる会場です。私は、この会場に名ばかりでしたが‘日本人のための通訳ボランティア’として参加していましたので、その会場で行われた活動についてレポートします。



▲グローバル・ビレッジのにぎわい

若者の活動: タイ国内のNGOスタッフらが運営し、タイ国内から集められた若者(シェアの活動地の若者グループメンバーらも参加しました。)や他国の若者との交流を目的にしたワークショップを行いました。国の性教育に対する若者としての意見を、絵や文字で表現するグループワークなど様々な活動を連日実施していましたが、私の見学した限りではタイの若者ばかりで、他国

の若者の参加が少なかったため、国際交流という点では少し残念に思えました。今回のカンファレンスのために、タイ国内からは数百人の若者が参加し、この若者の活動に参加したり、会場のボランティアを行っていました。



▲若者のグループワーク。絵や文字で、性教育に対する意見を表現

HIV陽性者のセッション：第2回アジア太平洋HIV陽性者会議の結果発表を行うセッションがありました。抗HIV薬がまだ開始されていない国のHIV陽性者は、会議の参加を通して、治療薬を開始した他国の現状や治療における陽性者の取り組みを学び、自国に情報を持ち帰り他の人と共有したと発表していました。HIV陽性者によるトレーニングというセッションでは、タイのHIV陽性者グループメンバーが、自国で他のHIV陽性者団体らに広く伝授されているHIVの疾患や免疫システムについての説明方法をデモンストレーションしていました。

移住労働者のセッション：在日タイ人のHIV医療へのアクセスが言葉や滞在資格、保険などの問題で、まだまだ障害があるという現実を、「HIV/AIDS：在日外国人支援ネットワーク」のメンバーが劇で訴えました。

その他：ドラッグユーザーネットワーク、性産業従事者のHIV問題に取り組む団体、女性グループ、エイズに影響を受けた高齢者への支援グループなど、様々なブースが設けられ、参加者と自由に対話できるようになっていました。



▲HIVに影響を受けた高齢者を支援するグループのブース

とにかく、印象的だったのは会場を盛り

上げるためにタイのあらゆるコミュニティからの参加が多かったことです。他国の参加者がタイの取り組みから何かを得るばかりではなく、タイのコミュニティ自体もより一層、活動につなげるエネルギーを得たことでしょう。

●「HIVとお金をめぐって」

吉田 成美

今回の会議においては、基礎医学・臨床関連、NGO・社会関連など、様々な分野のセッションやワークショップ等に顔を出しました。一見バラバラに見える内容の中で、会議が終わってみると「経済問題」という共通のテーマが浮かび上がってきたように思えます。

基礎医学・治療関連では、世界規模の推計においてHIVウィルスのサブタイプ（＝亜類型）Cが47%、Aが27%と、欧米や日本で多いBの12%を上回るにも拘わらず、薬剤耐性等のデータはサブタイプBの情報が90%を占めると報告されました。「より多くの人々への影響と効果」を考えれば、CやAに関するデータが世の中の大部分でもおかしくないのに、この現実には、「より資

金があり、医療体制の整備された国々（欧米諸国や日本など）における『大多数』が『サブタイプB』である」という事実の如実に反映だと感じたのでした。

「（NGO活動における）持続可能性—資金調達の多様化—」と題したワークショップにも参加しました。内容的には、NGOの商業活動を通じた収益確保による活動資金源多様化の紹介がなされ、事例も示されて示唆に富むものでしたが、一方で、今回の発表は、発表者/実践者が既にタイにて著名で影響力ある人物（「Mr. コンドーム」として知られるタイの元保健大臣ミーチャイ氏）であること、法人設立や法人税等の法制が国により異なることから、即座に我が国にて応用可能とは断言できないな、とも感じました。

まだ短い期間ですが、私自身NGO活動に携わってみてお金が一番大事とは思わないものの、「先立つものがあれば解決する悩み」が現実には少なくないのも事実なので、このテーマは今後自分として関心を持ち続けたい（というか持ち続けざるを得ない）と痛感しました。

「NGOが別働隊で行う企業活動」について考えさせられた後、逆に「今世界で活動している民間企業は、HIV/AIDSに関してどのような取組をしているのだろうか？」と思ったところ、丁度「AIDSに対するビジネスの役割」と題したシンポジウム開催を知り、顔を出してみました。そこでは、コカ・コーラ、ハイネケン、エスコム（アフリカ最大の鉱山業）、タタ（鉄鋼を中心とするインドの財閥）、アボットなどの世界的大企業の担当者が、各々のHIV/AIDSへの取組について語っていました。今回の会議はアジアでの開催なのに、アジア第一の経済力を有する筈の日本の企業の姿が壇上に皆無だったことは、残念でした。発祥の地を問わず、特に多国籍展開する企業であれば、世界におけるHIV/AIDS問題の持つ広がりをもっと意識して活動する必要がある、と強く思った次第です。



▲世界的な製薬会社のブースがいくつも

は、残念でした。発祥の地を問わず、特に多国籍展開する企業であれば、世界におけるHIV/AIDS問題の持つ広がりをもっと意識して活動する必要がある、と強く思った次第です。

会場には、一般の市民もアクセスできる場所として「グローバル・ビレッジ」というコーナーが設けられ、様々なNGO/NPOのHIV/AIDSに関する展示や、HIV/AIDS以外も含むタイのNGO/NPOによる特産品の販売などがなされていました。お土産物を探しにたまたま立ち寄った「グローバル・ビレッジ」内の1ブースのオーナーの言葉、「タイの陽性者たちのサポートと自立を目指して活動している私たちの団体が今回の国際会議の公式バック2万枚を受注して、全て手作りで作り上げた」を耳にして、HIV/AIDSにおける経済の問題を一市民としてサポートするには色々なやり方があると感じ、早速産品を買いためたのでした。

●「トランスジェンダーとHIV」

東 優子

広大な会場で溺れる

会議内容についてご報告する前に一言…。さすが、今回の会議は、国際エイズ会議で最多参加人数を誇るというだけあって、会場がもの凄く広い！ 普通、会議に出席すると、各セッションが行

われている会場で、あるいは移動中の廊下でいろんな人とすれ違って、「何に出た？ どうだった？ おすすめのセッションは？」といった情報交換が頻繁にできるものですが、今回は少し勝手が違っていました。久しぶりに参加した大きな国際会議ということもありましたが、事前の作戦が不十分で（反省!）、大量のプログラムと広い会場の中で溺れてしまい、効率よく各会場を回ることができなかったことが大きな反省点です。

もう一つ不満を言えば、私自身はコミュニティとしての「女性」「トランスジェンダー」「若者」による、あるいはこうしたコミュニティに対する取り組みに関するセッションに注目していましたが、（主催者側でも各プログラムの組み方については出来る限りの工夫と配慮をされたのでしょうか）「ジェンダー／セクシュアリティ」に関して出席したいと思うセッションが、同じ時間帯に組まれている場合も多く、残念な思いをすることもありました。とにかく会場が広いので（シツコイ?）、あるセッションに出て、「こりゃムダだ」と思っても、別の部屋に移動するのに貴重な時間をロスしてしまう、ということも多々ありました。



▲トランスジェンダーのシンポジウム

トランスジェンダーと HIV/AIDS

日本のエイズ業界では、まだほとんど取り上げられることがないのですが、諸外国においては職業差別を含む様々な社会・文化的要因によって、トランスジェンダー（TG）が直面する HIV/AIDS の問題が深刻であることが議論されています。職業上の選択の不自由や男性パートナーとのパワーバランスにより、性の健康に関するリスクが高くなることがとくに懸念されるのが、MTF（男性から女性への）トランスジェンダーですが、彼らは統計上「男性」として分類されてしまうために、固有の問題が顕在化しにくくなっているという問題点も指摘されています。第6回アジア・太平洋地域国際エイズ会議（メルボルン、2001年10月5日～10日）では、会場内を歩く参加者の顔ぶれとしても、またプログラムとしてもトランスジェンダーのビジビリティは、非常に高かったのですが、今回は CSW（コマーシャル・セックス・ワーカー）や MSM 関連のセッションでトランスジェンダーの問題を取り扱った発表があったものの、トランスジェンダー関連のプログラムを探すのに苦労するほど、全体的にはかなり影が薄くなってしまっていました。

そんな中で、トランスジェンダーに関して開催された2つのワークショップに参加してきましたので、ご報告いたします。1つ目は、米国の医療従事者による「トランスセクシュアル（TS）の治療とケア」でした。これは、主に「トランスセクシュアルとは何か」といった本当に基礎の「き」を解説するような内容で、HIV/AIDS との関連は希薄でした。期待はすれではあったのですが、40名ほど入る会場は満席に近く、TS/TG に関して先進国であるはずの米国・サンフランシスコでさえ、医療従事者一般における認識不足が深刻で、そのことが当事者の医療サービスへの

accessibility を困難にしている現状を改めて認識することができました。

もう一つは、マレーシアの法学者が主催したワークショップで、マレーシア、タイ、アメリカ、ポルトガル、ミャンマーのコミュニティ・ワーカー（TG 当事者）が壇上に上がり、それぞれの国での現状と課題を語る、というものでした。各国のスピーカーが共通して口にしたことは、TS/TG が性的マイノリティ中のマイノリティであり、社会・文化的要因に起因する高い脆弱性が当事者の SRH（セクシュアル／リプロダクティブ・ヘルス）を脅かしている現状でした。

トランスジェンダーに固有な問題に対する関心と認識が不十分である現状においては特に、メルボルン会議をさらに発展させた形で、トランスジェンダーのビジビリティを高めるプログラム構成を考慮すべきだと、改めて感じた今回の会議でした。

●「戸惑いの1週間～Access for all の叫び声を眼前にして」 大内 幸恵

会議中は、何かが自分にフィットしなくて、イライラしていた。ずっと寄り辺ないような気持ちがあった。それは、初日からずっ

と叫ばれていた今回の会議のテーマである Access for all の叫び声や雰囲気のうねりのようなものに、自分の気持ちが乗っていかなかったことが原因だと思う。バンコクのドンムアン空港に着いたときから



▲ゾウのパレード

お客様扱い。会議初日からゾウの行進や当事者団体のパレード、著名人の講演会等々の華やいだ雰囲気のなかで、余計に気分は落ち込んでいた。

なぜこんなに気分が乗っていかなかったのかというと、研究者として、これから日本で自分が何をやっていけばよいのかに、ずっとこだわっていたからだと思う。そういう自分にとって、陽性者への満足な治療を提供できない国から参加している当事者の叫び、今回の会議のテーマは、その声に応えようとしていない自分にたいする刃のような気がして辛かった。だからこそ余計に、エイズ問題を南北問題と重ね合わせて考えていくことは大事で、世界中の人が皆で共有すべき課題だと実感することも少しはできたかもしれない。



▲「ジェネリック薬を今！」座り込みをする女性

しかし私は、なにか大きなシステムの中で問題をとらえるのではなく、人と人との関係性での、よりミクロな微細な問題として HIV/AIDS を見つめていきたいし、それが日本では大事になると考えている。会議中ではおそらく、同じような問題関心から予防

教育やケアについての発表があったと思うし、こういう問題関心を他の参加者と共有することはできたはずだと思う。それにもかかわらず、会議中は、自分の思いと、今回の会議のテーマや議論とを重ね合わせることが最後までとうとうできずに、うろうろして戸惑うばかりだった。



▲最大規模となった今回の国際エイズ学会。開会式も大々的

でも、そういう迷いや戸惑いのなかで、今の自分の状況や、自分がどこで、どういう視点から研究していきたいのかを、漠然とではあるが自覚することができた。なので、辛い経験ではあったけれども、出席できてよかったと思う。今度もし、再び会議に参加する機会があれば、自分の研究を発表できるようになっていたと、今は思えるようになっている。

●『「Access for all」：ある物語の終焉?』

アフリカ日本協議会 稲場 雅紀

世界は変わったのか

「すべての人にアクセスを」…世界から2万人をバンコクに集めて先月開催された第15回国際エイズ会議のスローガンである。革命的な意味を持つはずのこのスローガンが示したのは、実際には、一つの物語が終焉しつつあるということだった。

その物語は、4年前に、「沈黙を破る」(Breaking the Silence)というスローガンとともに始まった。2000年に南アフリカ共和国・ダーバンで開催された第13回国際エイズ会議…途上国、とくにサハラ以南アフリカが、その主人公だった。世界4000万人のHIV感染者、その95%以上が途上国に、70%がサハラ以南アフリカに集中している。途上国で抗レトロウイルス治療を必要としている人は600万人、しかしその5%以下、わずか十数万人しか治療にアクセスできていない。「沈黙を破れ」：世界は動き始めた。

4年後。95年の世界貿易機構(WTO)設立によって導入された特許権絶対主義の強要は、少なくとも抗レトロウイルス薬(以下、ARV)に関しては通用しなくなった。世界はインド製の安価なジェネリック薬のARVを手にした。世界はHIV/AIDS、マラリア、結核と闘うための資金を捻出する機構として「世界エイズ・結核・マラリア対策基金」(GFATM)を手にし、多くの途上国で、HIV/AIDSを国家の主要課題として取り組む体制が成立した。HIV/AIDSは開発援助において、高い優先順位を得た。ブラジル、タイ、ウガンダなど、HIV/AIDSの「成功国」が登場し始めた。世界は変化し、たしかに、もとのままではない。

「Access for all」：バンコク国際エイズ会議は、この変化を繰りかえすセレモニーとなった。各国や国際機関の首脳たちが、「Access for all」にこぞってエールを送った。開会式と閉会式で、私たちは耳を傾けた：政治家たちの「配慮リスト」に誰が入るのか。「Men who have Sex with Men」は入るのか。「Intravenous Drug Users」は入るのか。「Sex Workers」は入るのか。「寛容さ」を一番示すのは誰なのか。

「寛容さ」：テロと戦争が強調される世界の中で、この会議場では「寛容」が幅を利かせている。開会式では、タイで数千人が殺害された「対麻薬戦争」を指揮したタクシン・チナワット首相が、同じ口から「薬物使用者への健康被害軽減アプローチの導入」を示唆した。欧米の巨大製薬企業は「ポジティブ・アクション」などと称して、アフリカのNGOのリーダーたちがバンコクに行く金を提供した。かつて特許権絶対主義に固執していた、その同じ企業が、今では自分が開発した新薬を惜し気なく安価にアフリカに卸している。たしかに、世界はもとのままではない……世界は、はるかに複雑になっている。

「寛容さ」の前に溶解する物語：市民社会の原理は?

物語の終焉?こう言った方が正しいかも知れない:「寛容さ」の前に、物語は「融解しつつある」と。一つのできごとがあった。エイズ・アクティヴィストたちが、新興ブランド薬企業である米国ギリアド社のブースを襲撃した。ギリアド社は自社の最新鋭のARVであるテノフォビルが予防薬としての効果を持つかどうか、アフリカ三カ国とカンボジアでセックスワーカーを対象としたコホート調査を計画した。計画では、セックスワーカーを二群に分け、一方にはテノフォビルを、一方には偽薬を投与して、HIV感染率の変遷を経過観察することになっていた。調査に資金を出したのはゲイツ財団、調査の対象たるセックスワーカーたちを調達したのはリプロダクティブ・ヘルスの分野で世界的に活動する米国のNGO、ファミリー・ヘルス・インターナショナルだった。



▲町中のあちこちで見かける大看板“access for all”

「寛容さ」の前に、「Access for all」の物語だけでなく、市民社会も溶解しつつあるのか?

カンボジアのセックスワーカーたちはこの調査を拒否し抗議した。アフリカ三カ国からは、同様の動きはなかった。アフリカでは、政府がつまづきながら必死に国家ARV供給計画を立案・遂行しようとする傍らで、スラムでAIDSを発症した人々は家賃を払えずにあばら家から叩き出されて死んでいく。HIV感染拡大をもたらした要因、男たちを故郷とはるか離れた鉱山や大都市や白人農場での単身労働に、女たちをセックスワークに駆り出す貧困と、それを強制する国際経済の構造には、メスは入らない。「寛容さ」の背後から、再びあの歌が聞こえてくる。「ABCモデル」。禁欲 abstinence と貞操 be-faithful。19世紀にアフリカに入った白人宣教師たちが「アフリカ人を文明化する」と称して歌い続けた古い歌。形を変えた植民地主義。

世界は、変わらないのか。

「Access for all」：この物語によって、世界は変わったのか。変わっていないのか。どちらが錯視なのか。

閉会式の前日の夜、ネルソン・マンデラは言った。「すべての人が、違いを作り出すために努力しなければならない」。

この言葉には、誤りはない。

Living Together計画 始動!

Rainbow Ringとぶれいす東京が呼びかけ団体となり、NGOや企業体、(財)エイズ予防財団が主催のさまざまなイベント「Living Together計画」が始まりました。8月22日、新宿2丁目のレインボー祭りの日を皮切りにseason:01が開催、その中のいくつかのイベントをレポートします。



▲フライヤー表紙

HIV陽性の人も、HIV陰性の人も、一緒に生きている。検査を受けたことの無い人は自分の状態をまだ知らないだけ。感染しているかしていないかは外から見ただけではわからないけど、もうすでに、みんな一緒に生きている。HIVはどこかの誰かの問題ではなくて、もうすでに私たちの問題。そんな発想を形にしたのが「Living Together計画」。チャリティーパーティーや、カフェ、トークイベント、写真展、リーディング、成果発表会…。いろいろな形でさまざまな人たちの共感を呼んでLiving Togetherの輪が広がっていきます。(web-site <http://www.living-together.net> もご覧ください。)

■「手記リーディングのタベ」

HIV陽性の人や、その家族・パートナー・友人が書いた手紙や手記を、さまざまな人が朗読をして自分なりのコメントをしてもらうというイベントが、9月5日(日)新宿2丁目のバー「九州男」で行われました。このリーディング・イベントには、HIVにまつわる経験や思いを当事者にとどめずに、コミュニティに共有していく仕掛けがあります。当事者が手記・手紙を書く。それを別の人が朗読をして自分なりの思いをこめてコメントをする。それを会場で聞き追体験をし、そして、ある人はまた手紙を書く。ただHIVの情報を提供するのではなく、HIVにまつわる人の思いを自分ごととして語り、実感の伴ったメッセージを身近な人に伝えていくという、新しい啓発スタイルの実践でもあります。

今回は、150人近い人が集まり、大きな感動を呼びました。さまざまな思いで参加された大勢の皆さんとこの場を共有できたことに感謝。

(矢島 嵩)

★『手記リーディングのタベ』で感じたこと

G. O. Revolution (Badi編集部 Junchan)

以前『アクタ』でリーディングのイベントがあったときも、あったかくて、いろんなゲイの人たちの人柄や思いが透けて見えてきて素晴らしいなあと思いました。が、今回はさらにまた違った感動を与えて

くれる、素晴らしいイベントでした。

HIVというウィルスは、僕のような、すでにあまりにもそれを身近に感じ「共に生きて」しまっているゲイ・ピープルにとっては、過去にあった悲劇的なような色



▲司会のハスラーアキラ(左)と

G. O. Revolution

合いが薄れて空気のような存在になりつつあると思います。そういう現在、HIV/AIDSについて最もセンシティブに語れるのは、感染者の方のケアにあたっている方々や、感染者の友人等、ゲイの周りにいるストレートの方なんだと気づかされました。

美術ジャーナリストの橋本麻里さんは「自分のエンプティネスの中にエイズについての様々なことを盛って、外部に伝えていきたい」と、明晰に真っ直ぐに語りました。10年も前から都立駒込病院で感染者のために「Kラウンジ」というあたたかな居場所を与えてくれる小柳ゆみ子さんは「感染者の方が語る優しい母親像に、いい治療をしていくための大事な鍵を感じた。自分も二人の子を持つ母親だが、彼等の母親たちのように優しい存在でいられたらどうか」と涙ぐみながら語ってくれて、会場にすすり泣きが洩れました。有名なバンド「PERSONZ」のJILLさんは、ファンの方とのメールのやりとりの中で、HIV感染を告げられ、歌というカタチで彼への応援のメッセージを表現しながら「今でもずっと、彼にかけてあげる言葉を探している」と素晴らしい言葉を語り、さらに、コンサートでも見せたことのない、名曲「DEAR FRIENDS」のアカペラを披露して、会場は大きな感動に包まれました。



▲JILLさんアカペラ

ゲイたちは、パレードや二丁目のお祭りを通じて、世の中にも誇れるようなコミュニティを作り上げてきました。でも、ゲイコミュニティのパワーだけでは、今起こっている深刻な感染の拡大を食い止めることが難しい。もっと一般社会の、ゲイのとなりにいる人たちと手をつないでいくことが大事だと思います。

また、二丁目のゲイたちは、ここ最近、『アクタ』を中心に、世界にも類を見ない、素晴らしくあたたかで同時に先鋭的なアート表現やメッセージを生んできました。今回のイベントは、その結節点というか、(田口さんの写真展なども含めて)優れた表現を見てもらう、またとな機会だったと思います。

ゲイコミュニティと一般社会がシームレスにつながることで、双方にステキな信号が流れ、もしかしたら血のめぐりが悪くなっていたかもしれないHIV予防啓発というものに、健康的な刺激が与えられたんじゃないかと思います。今後ともときどき、こういう接続をして活性化を図っていきましょう。

★「多様性とバランス」

ようこ(リーディング・イベント構成担当)

「リーディングのタベ」は、Living Together計画の1つとして行われました。Living Together計画は、「あらゆる人にとってHIVが身近なものである」というメッセージを、「多様性」という手法を使って表現するところに特徴があります。裏話っぽいですが、このイベントに関しても、準備段階から「出演者がゲイばかりにならないように」とか、「手記の内容がHIV+当事者の執筆したものだけに偏らないように」といった、多様性とバランスに特に配慮して進めてきました。それだけに、「十人十色」の出演者の皆さんが、朗読という独特の形式に、慣れないながらも挑戦してくださったことは、本当に嬉し

かったです。また、多様性はお客さんの側にもあるわけで、ひとつの手記の朗読を通してお客さん一人一人が何を感じるか?…これも十人十色だと思うんです。ですから、何らかの答えを求めたり与えたりする場ではなく、HIVについて感じたり考えたりする機会として、この「リーディングのタベ」という時間を共有してもらえたら、大成功なんじゃないかな?と思います。

★参加者のひとこと感想文

「このイベントに参加していかがでしたか?」

「HIVの知識が少ない自分でも『何をやればいいか』くらいはわかる、実行もできる。その勇気をもっていれば、だれもがすばらしい人生を過ごしてゆける。人に押しつけるのではなく、自身で考え行動すべきと、今回のイベントに参加して思いました。」朗読：TOMOさん（G-men モデル）



▲ TOMOさん

「顔の見えない大勢の読者に向けて言葉を発する仕事をしています。



▲ 橋本さん

目の前に言葉を受け取る相手がいて、発した言葉のリターンが直ちに返ってくるのは、猛烈に新鮮な体験でした。多くの人の言葉から、むすうの何かが立ち上がった夜。この可能性の渦のようなものを拡散させずに、何かを始めていければと思っています。」朗読：橋本 麻里さん（美術ジャーナリスト）

「いろいろな立場からのお話が聞けてとても有意義な時間が過ごせました。お話の内容を日常の診療にもいかせれば、と思います。」朗読：岩本 愛吉さん（東京大学医科学研究所付属病院院長／教授）



▲ 岩本さん

「パートナーの死を受け入れる作業は、とても難しいこと。悲しみ、自責の念、後悔などが絡み合っている感情を自分で受け入れ、整理するのは大変だけど、「生きてゆく自分」を大事にするのが、結局は亡き人の供養にもなる。未来を信じよう!」朗読：ジョーさん（パートナーをHIVでなくした経験をもち、同様の経験をした人の手記を朗読してくれました）



▲ ジョーさん

「自身の手記を朗読されたが、朗読してくれた方も自分と同じ立場の人だったのでその時々気持ちを十分に理解してくれていたようだ。会場の後方で聞いていたが泣いている方もいたようで、皆さんの心に何かを伝えることができたのかなと思った。」会場より（パートナーをHIVでなくした手記を書してくれた方）



▲ KAZUYAさん

「とてもきんちょうしたものの、良い経験をさせて頂きました。また自分で力になれる事があれば、協力させて頂きたいと思いますのでよろし

くお願いします。」朗読：KAZUYAさん（Badi モデル）



▲小柳さん

「手記の中にあった『…あなたが健康で幸せなのがおかあさんの唯一の願いなの…』ということば。とても深い一言です。相手の幸せを願い、それを受け止めることの意味を改めて考えました。意義のある会に参加させていただきまして、ありがとうございました。」朗読：小柳 ゆみ子さん（K ラウンジ）

「遅れて会場に駆けつけたら、ちょうど僕が書いた手記が読まれているところだった。HIVも僕自身もそのまま受け入れてくれた母とパートナーのあのころのことを思い出すと、まだ胸がキュッとします」会場より：ダンデライオンさん（母親への告知経験を書してくれたHIV+）

「小柳さんの印象が強かったのは、ゲイ、HIVが日常的でない主婦層の視点を持っているから。手記に共感するだけでなく、その層に対する提案性のある発言をしてたから。この層の意見って意外と聞いたことが無いのよね。」会場より：トオルさん（ゲイ、HIV+）

「知ることから始めよう。そんな気持ちで飛び込みました。知らないことは恐れやまちがいを生みます。とてもいろいろな話を聞き、とても生きていくことを再度考えました。参加してよかったです。ありがとう」朗読：JILLさん（ミュージシャン/PERSONZ Vocalist）



▲ JILLさんと司会の二人



▲ 青山さん

「なにかを表現することで人の前に立つのと違って、感じていることをどこまで伝えられたか自信がありませんが、参加できて、いい体験ができました。」朗読：青山 吉良さん（俳優）

「たくさんの人がいろいろな意見を出し合う事で、少しずつでも全ては良い方向に進んでいくと思います。」朗読：Takaさん（セックスワーカー）



▲ Takaさん

「私自身はHIVポジティブであることをカムアウトしてくれた友人知人が多数いるのですが、そのような環境にある人はそう多くないでしょう。その人たちに彼らの生の声を届けられた、とてもうれしい日でした。」朗読：福島光男さん（2丁目振興会会長/mf マスター）



▲ 福島さん

■ 田口弘樹写真展

8月22日(日)～9月5日(日)

@コミュニティセンター akta

このLiving Together計画のために、この夏あらたに撮りおろされた写真。東京、大阪、名古屋、福岡をまわった前回展にもまして、さらにLiving Togetherのココロが伝わる写真展になって帰ってきました。



▲写真展@akta



▲フライヤー

「ひとりでは生きていけない。ひとりでは存在できない。誰かいる故に我あり、だということに気づいてしまった。あらゆる想像力を駆使して、人とつながっていたい。これが、わたしの写真を撮るモチベーションだ。そんなこんなを上からの物言いではなく、グラスルーツなレベルから、提示していきたいと思っている。」(田口弘樹)

■ 「ささやきカフェ」～今だから話したいこと

@コミュニティセンター akta

8月27日(金)ゲスト:長谷川博史(JaNP+)

1980年代にニュースウィークのAIDS特集を読み、すでにセックスのスタイルを変えはじめていた。そんななか、自発的にHIVの検査を受け、予想外の「陽性」の結果を受け取る。1992年に告知を受けた当時の長谷川さんの戸惑い、仕事上の紆余曲折がありながらも、自分の一部であるHIVと彼自身がどう向き合ってきたのが語られた。告知後、セックスに後ろ向きになり、当時のパートナーに受け入れられつつも別れることに。その後、理解ある医師との出会いにより、彼自身のスティグマは徐々に形をかえていく。感染経路を問わない病院内の患者活動をはじめに、職場や普段の交遊関係においても、時間をかけてカミングアウトをすすめていったという。当日会場に高校生が参加していて、「ゲイの多くいる場に初めて来たけど、ここが僕の新たな出発点となった。」といううれしい反応もあった。(生島)



▲長谷川さん

8月29日(日)ゲスト:大塚隆史(Tac's Knot)

パートナーをHIVで亡くしたのが、15年前なので、現在の状況にどう役にたてるのかわからないと前置きしてはしまった。しかし聞き終えて、彼自身がどのように困難を乗り越えたのか、彼を囲む人間関係がどう機能したのかが伝わり、多くの人にとっても貴重な話を聞くことができた機会であった。1980年代の後半、マスコミが感染者探しを行い、薬剤がAZTのみであった時代。ゲイバーを経営するカップルにとり、HIV+という事実が周囲からどうみられるかに敏感にならざるを得なかった。プライバシーを制限しつつも、信頼できる相手からは



▲大塚さん

サポートを受け取りつつ、パートナーの療養生活を支えた。そんな中、突然訪れた彼の死から次のステップを歩みだす。「死んだ人とうまくつきあえるようにならないと、生きている人ともいい関係が築けない」との言葉は特に印象的であった。(生島)

■ AIDS BENEFIT PARTY

新宿2目にて毎年開催される、レインボー祭。フィナーレの花火が打ち上げられた後、ADVOCATES TOKYO主催で、このパーティは、新宿2目の真ん中に位置するクラブで開催された。オーナーの吉田さんがHIV/AIDSのためにチャリティ面で貢献したいと、申し出てくださり実現したパーティだ。その世界でのビッグネームEMMAさんによるDJプレイをフューチャーした豪華なイベントで、男女、年齢層も様々な人があつまった。総入場者



▲フライヤー

数:178人 / ADVOCATES TOKYOから頂いた寄付金:133,500円だった。オーナーの吉田さんの心意気に最大限の感謝をあらわしたい。この収益はLiving together loungeの運営や、HIV陽性者や周囲の人の手記集の印刷費用の一部に充てられる予定。(生島)

■ 「HIV感染予防の効果に関する研究」成果発表会

9月4日(土) @コミュニティセンター aktaにて

「ゲイ・バイセクシュアルを囲む環境は今」

市川誠一(名古屋市立大学)

「新しい予防啓発手法の開発について」

生島嗣(ぶれいす東京)

同性愛者にむけたセイファースセックス啓発運動が進化し、新たな局面を迎えている。その象徴的な運動が、Living Together。「同性愛者も異性愛者も、HIV陰性者もHIV陽性者も、ともに暮らしているのだ」。ここ数年の感染者の増加を踏まえた、今までにないメッセージを掲げた運動である。



▲市川さん

Living Togetherの多様なイベントの一環として、『「HIV感染予防の効果に関する研究」成果発表会』が開催された。市川誠一(名古屋市立大学)教授は、ゲイ・バイセクシュアルを囲む環境を具体的な数値を交え発表。ここ数年のHIV感染者の増大が、危機的状況にあることを指摘。また、東名阪以外の地方都市における感染者増加、それに対応する設備の不足などの現状、行政の対応状況などにも言及した。「ハッテンバ」など、同性愛者独特の文化を深く把握した上で啓発運動を進めているスタンスが伺える内容であった。

ぶれいす東京の生島嗣氏は、ぶれいす東京が行ったアンケートなどをもとに、状況にあわせた柔軟な運動が必要であることを訴えた上で、Living Togetherの構想を発表。「HIV陰性者もHIV陽性者も、ともに暮らしている時代」だからその、セイファースセックスに対する意識の向上が必要であると訴えた。参加者からは質問なども多く寄

せられ、状況に則した啓発運動を展開することの重要性を改めて認識するイベントとなった。

(歌川泰司:リクルート・オールアバウト・ジャパン「同性愛」担当ガイド <http://allabout.co.jp/relationship/homosexual/>)

■ LIVING TOGETHER LOUNGE

～ WORDS, MUSIC and GOOD TIME ～ @advocates bar

VOL.01 : 9月20日 (MON) (祝) 16:00～20:00

UNPLUGGED LIVE : サクラリアオ+ホシノアキヨ

MUSIC : WARA

第一回目は、サクラリアオさんのギターと、ホシノアキヨさんのボーカルの、アコースティックなライブだった。伸びのある声と、ギター

の共演が耳にこちよく、皆の心をあたたく包み込んだ。また、当日は、会場でもある ADVOCATES TOKYO の店長の Takaki さん、ギターの桜井さん、張由紀夫さんが、HIV陽性者の手記を朗読してくれた。会場では、涙する若者もいて、人事ではない何かを感じとってくれたようだ。あたたくて、リラックスできるこのイベントに今後の大きな可能性を感じた。(生島)



▲ホシノアキヨさん(左)とサクラリアオさん



▲朗読: Takaki さん

ぷれいす東京 新人合同研修会 開催

今年で3回目となる、各部門合同の新人ボランティア研修が豊島区立生活産業プラザにて行われました。今回はおもにインターネットによる募集で約20名の研修生が参加することになりました。9月5日のオリエンテーションに続き、9月12日、20日、26日の3日間、朝の10時から夕方5時近くまでという研修スケジュールで、濃縮した時間を過ごしてもらいました。

■「新人ボランティア合同研修報告」

牧原 信也

研修を受講するにあたり、今年は3日間を通じて、(1) HIV/AIDSの分野で、グランドルールをもとにコミュニケーションしてみましょう、(2)自分の中に起こる疑問や感情をできる範囲で表現してみましょう、(3)様々な背景を持った人々と積極的に関わってみましょう、という3つの目標をたてました。

そして、各日程ごとに、初日は、自分がHIV/AIDSに対してどのようなイメージを持っているのかに気づく、2日目は性の多様性に気づく、3日目はHIV/SIDSに関連する課題を知る、ということを目指しました。

研修を通じての目標は、この研修を参加者自身ができるだけ積極的に、かつ安心して参加できる場を作るために立てました。研修の中では性についての語りや、参加者の個人的な経験を話す機会があります。そうした時



▲発表をしたり、話し合ったりで、座ってられない?

にできるだけ参加しやすくなることを意図しました。

また、各日程ごとの目標は、スタッフとして活動してもらう前に、自分自身の傾向について気づく事、自分自身の性に対する意識、やセクシュアリティに対する意識を知り、自分なり

の関わりかたを自分で見つける事、そしてHIV/AIDSのことを自分自身のこととして考えてもらうこと、というコンセプトのもとに、スケジュールともども考えたものでありました。

果たして、参加者の皆さんにどこまで伝える事ができたのか、というこ

とはわからないところではあります。

ただ、運営側として見えていたことは、どのコマにもとても熱心に参加してくれていたことでしょうか。タイトなスケジュールに情報がてんこ盛り、というなかで大変だったと思いますが、皆様お疲れさまでした。今後は各部門での活動となりますが、これからよろしくお願いします。

■「新人研修を受けて2年」

ぷ☆PEP 柳田 知子

三日間の新人合同研修会にお手伝い、というか参加をしてきました。私が新人研修を受けたのは2002年の10月。つまり、ぷれいす東京のメンバーになって2年になります。

当時、私が研修を受けたときに感じたことは、自分のプライバシー管理と他人へのプライバシーへの配慮をしながらコミュニケーションをすることが非常に難しいということです。研修を受けるまで、そういうことをきちんと考えたことがありませんでした。今回研修に参加した新人さんと話してみると、やっぱり私と同じような戸惑いを感じているようで、当時の自分を思い出しました。

そして、今年の新人さんの研修中の熱心な姿勢には頼もしさを感じました。申し訳ないことに、研修を受けていた当時の私は目的が曖昧なままに研修に参加して活動を始めたので、今年の新人さんに比べると、当時の私が研修会から吸収できたことは少なかったのではないかと思います。目的やねらいを明確にすることの重要さは、活動していく中で学びました。だから、今年の新人さんはいち早く活躍してくれるものだと思っています。

また、私は今、ぷ☆PEPでピアプログラムの開発に関わっていますが、そういう立場で今回の研修に参加してこの研修会のプログラム内容・構成の緻密さとクオリティの高さを再確認しました。私は今年の春から社

会人になったのですが、今働いている会社で受けた研修は一方通行の講義形式のものがほとんどで、そこでは自ら気づきを得ることはほとんどなく、働くモチベーションは上がりませんでした。ぶれいすで活動し始めて当たり前のように思っていた、参加型プログラムとその後のフォローが参加者に与える大きさをそのときに思い知りました。

3日間今回の研修会に参加して、私自身も学んだことが多く、新人さんからもよい刺激を受けられました。この機会を今後の☆PEPのプログラム開発に活かせればと思います。

■研修参加者の感想文

「研修と出会いに感謝！」 ノブ

自分がこの研修に参加するキッカケになったのは同じゲイサークルに、ぶれいす東京に参加している人が居たからなのですが、そもそもは以前付き合っていた人の「コンドーム着けて」の一言だったのかも知れません。それまではコンドームを使う事なくセックスを繰り返してきていた自分。考えてみれば彼が初めてHIVのことを真面目に話してくれた人でした。そんな人間が研修に参加したのだから、「えっそうだったの!」っと感心するばかり、そして一日目の感染者の手記を読み終えた頃には、昨日までの自分を恥ずかしく思い、それとともにHIV感染を防ぐ事の難しさ、誤解と偏見、この病気とそれを取りまく環境の複雑さを思い知らされました。三日間の研修を終え、自分のなかに有る偏見や弱さ、さまざまなセクシャリティ、HIVは人の思いによって防げることなど今までの自分では気がつかなかったことを学び、そして何よりこの貴重な三日間の体験の中でスタッフの方々や他の参加者の方々のそれぞれの思いに触れたことで、自分にも出来る何かを見つけられたような気がします。

「ボランティア活動の研修会に参加して」 SHIMIZU

昨年、定年退職して説明会へは伺ったのですが研修会への参加は専門学校への入学と重なって1年越しの参加でした。もう告知を受けて9年目。歳も重ねてきたのである程度の知識はあるつもりでいましたが、医学的基礎知識や用語、性の多様性について学ぶことの多い



▲グループに分かれての「陽性告知後のケーススタディ」

3日間でした。研修の帰りにブックセンターに立ち寄り数冊を買い、あらためて勉強のし直しをしているところです。私にとって問題がグループごとのコミュニケーション。仕事やスポーツで若い方

達との接触は慣れていても、こういう活動しようという方達の場合は初めてなので、珍しく緊張と戸惑いが初日にはありましたが若い方達の緊張の中にも一生懸命言葉を搜し、選んで真面目に前向きに話すのを聞いて、人との話、接し方はグランドルールのとおりだな、と反省

	9月12日(日)	9月20日(月/祝)	9月26日(日)
10:00	グランド・ルール	グランド・ルール	グランド・ルール
10:15	社会的な背景 (池上千寿子)	セクシュアリティと多様性について(1) (池上)	HIV感染後の生活と社会サービス (山里順子／牧原信也)
11:15	エゴグラム (野坂祐子)	セクシュアリティと多様性について(2) (中村美亜)	プライバシーとは (生島)
12:00	昼食	昼食	昼食
13:00	交流分析(野坂)	Safer Sex Work リスクアセスメント (生島／兵藤／中村)	感染者の手記を読む(2) (生島)
13:50	医学的基礎知識(1) HIVの基礎知識と検査法 (福原寿弥)	相手のある保健行動～コンドーム使用と使用依頼～ (池上)	振り返りの時～今後の研修について
15:10	感染者の手記を読む(1) (生島嗣)	医学的基礎知識(2) 性感染症の基礎知識 (福原)	
16:20	振り返り	振り返り	振り返り
16:40			

とともに今後のボランティア活動にたいへん役立っていくと思いました。最後に性別も生活も年齢も異なる人達をまとめ講義、進行されたスタッフの皆様感謝するとともに、幸いにも副作用なく過ごしているこれからの私の残りの人生を少しでもお役に立てたらと思った研修会でした。

「研修を終えて」 木村恭子

正直、「研修に3日間もかけるなんて、ヘビィだ」というのが、最初に新規ボランティア募集要項を見た時の印象でした。ところが研修を終えた今となっては、「これでもう、実際の活動に入っちゃうの?」という気持ちです。研修自体がとても楽しく学ぶべき事が多かった為、あっという間に3日間が過ぎてしまったという事と同時に、まだ自分が実際の活動に入る準備が出来ていない気がしているからです。今回の研修では、知識として持っている事を実践の場でどう活かせるか、またその反対に、実際の活動に必要な知識や情報をどう得てゆくか、そしてその時自分がどのような事を感じ、それが相手や周囲の人々にどんな感情や影響を与えるか。この、「頭と身体と精神がリンクしている」とでもいうべき状態の難しさを改めて感じました。とはいえ活動に参加するのは単純に楽しみで、各部門の専門研修や、更に実践から経験し身をもって学んでゆく事に対し自分自身でも期待を膨らませています。

青年海外協力隊エイズ専門研修実施報告

8月16日から20日にかけて、JICA広尾訓練研修センターにおいて、エイズ専門研修が行われました。JICA (Japan International Cooperation Agency: 独立行政法人 国際協力機構) からの委託を受け、ぶれいす東京が企画・運営したもので、青年海外協力隊のエイズ対策・技術補完プログラムとして実施されたものです。オリジナルのグループワークや、多彩なゲストを招いての講義を交えて、充実の5日間となり、6名の青年海外協力隊員が参加・修了しました。

研修スケジュール

8月16日(月) 1日目 HIV感染のリスクと自己マネジメント

- 10:00～11:00 オリエンテーション、アイスブレイクなど
(担当: 生島 嗣)
- 11:00～12:00 「性に対する自己の態度や意識への気づき」とリスクアセスメントワーク (担当: 生島)
- 13:00～14:30 感染予防と治療ケアの知識 (講義: 生島)
- 14:45～16:00 「コンドーム使用の困難性と異文化でのリスクマネジメントの方法」 (講義: 池上 千寿子)
- 16:00～17:00 振り返りと評価シート記録

8月17日(火) 2日目 社会的なマイノリティとHIVの脆弱性

- 10:00～11:00 「ヴァルネラブルグループとその取り組み」 (講義: 池上)
- 11:00～12:00 「貧困とセックスワーク」 (講義: 桃河 モモコ)
- 13:00～14:00 「セクシュアリティとエイズ」 (講義: 砂川 秀樹)
- 14:15～15:15 「過去の予防・啓発政策、プログラム」 事例分析ワーク1 (池上)
- 15:15～16:15 「過去の予防・啓発政策、プログラム」 事例分析ワーク2 (兵藤 智佳)
- 16:30～17:00 振り返りと評価シート記録

8月18日(水) 3日目 感染者支援と支え合うコミュニティ

- 10:00～11:00 「セルフヘルプグループの取り組み」 (矢島 嵩)
- 11:00～12:00 エイズの社会的背景、治療アクセス (長谷川博史 / JaNP+)
- 13:00～16:30 「差別・スティグマとは」を学ぶ (グループワーク: 生島)
- 16:30～17:00 振り返りと評価シート記録

8月19日(木) 4日目 異文化での具体的なエイズの取り組み

- 10:00～12:00 事例発表〈アジア/南アメリカ〉 (講義: 沢田 貴志 / シェア)
- 13:00～15:00 事例発表〈アフリカ〉 (講義: 角井 信弘 / ジョイセフ)
- 15:10～16:40 途上国コミュニティでのプログラム立案に関する参加型ワーク (稲葉 雅紀 / アフリカ日本協議会)
- 16:40～17:00 振り返りと評価シート記録

8月20日(金) 5日目 グローバルスタンダードとしての人権

- 10:00～11:00 エイズについてのグローバルな人権ガイドラン (講義: 樽井 正義 / 慶応義塾大学文学部教授)
- 11:00～12:00 文化の独自性と自己決定権1 (グループワーク: 兵藤)
- 13:00～13:45 文化の独自性と自己決定権2 (講義: 兵藤)
- 14:00～16:00 情報管理・プライバシーの権利 (グループワーク: 生島)

■「異文化でHIVに取り組む人達へのメッセージ

～JICA研修を終えて～」

兵藤 智佳

海外で海外青年協力隊としてエイズの活動をする人を対象とした研修が行われました。研修は、あの「ニッポンのSadako」こと、緒方貞子がトップにいるJICAが主催でしたが、ぶれいす東京は、「委託」という形で、実質的な企画、運営を担当しました。私は、その中でも主に、ワーク全体のコンセプトと流れの案を作りました。近年、ぶれいす東京は、様々なエイズに関わる人々を対象とした研修プログラム作りに力を入れており、特に、参加型のワークショップの開発に積極的に取り組んでいます。今回の研修の中でも、専門家を招いての講義の他に、ぶれいす東京が独自に開発したいくつかのワークショップが実践されました。

5日間の長丁場であった今回の研修の大きな目的は、(1) 自分の問題としてエイズを考えられること (2) 社会的に弱い立場にある人々とエイズとの関連を知り、当事者の立場を知ること (3) HIV対策における人権の視点を得ることの3つでした。研修の構成を考えた私としては、外国に行って異文化の中で、エイズに取り組む人にとっては、以上のことがとても重要であり、知識としてではなく「体験」として感じ取ってほしいことだと思いました。

私は、性に関する事柄に関しては、「自分の価値観と同時に他者の価値観を知ることによって自分を相対的に見ること」が大切だと感じています。異文化では、日本にいる以上に自分とはあきらかに異なる価値観や伝統・文化に晒されます。その際に、「どちらが正しいか」ではなく、「どうして、そういうことになっているのか」、「いったい誰が、そう思っているのか」、「そこに力関係は、ないのか」といった理解の仕方、想像力が求められるのだと思います。これらは、コミュニケーションの第1歩であり、一緒に何が出来るのかを考える上でとても重要です。

そうした意味で、ワークショップでは、できるだけ「具体的な場」をつくることで参加者に「体験する」、「想像する」、「実証的な現実を理解する」ということを目指しました。慣れない方法にとまどいもありましたが、参加者も、そうした実践の意味するところは、わかってくれたと自負しています。参加者からは、「今までの自分の中にある既成の枠を揺さぶることができた。」、「問題に直面した時に、どこに答えがあるのかでなく、ない答えに向かってどう考えたらよいか重要だということがわかった」等というコメントをいただいています。そうした反応に、企画した方としては、「しめしめ」とほくそえむのでありました。



▲真剣な眼差しの研修生

今年の夏は、お盆返上でぶれいすで初めての取り組みとなる、青年海外協力隊での HIV 専門研修を行いました。場所は広尾のこじゃれた場所。会場に向かう途中のカフェには犬連れのセブなにおいのする人があふれ、時にはファッション誌の撮影が普通に行われてるような場所でごさいました。なんだか、いつもと違う雰囲気ここにいい緊張感を覚えながら、5 日間を過ごしました。

今回がいつものボランティア研修と違うのは、参加者が、あらかじめ HIV/AIDS に特別に興味を持っていたわけではないけれども、海外協力隊員として発展途上で活動をしていく上で、今後 HIV/AIDS と関わっていく人達というところだったのでしょうか。そういった対象のニーズや、今まで HIV/AIDS に関わったことがない人がどこまで理解できるのかなど、あれこれと思案をめぐらせながら、研究部長の兵藤さんのもとにスケジュール組みを行ったのです。

今回の研修生は 20 代の方が多く、とりあえずまだまだ 20 代の私としても親近感を覚えておりました。でも研修を通じて感じた事は、全員がとっても真面目というか素直というか、すべての講義に真剣にとりこんでいたということでしょうか。ぶれいすの研修は、受けたことがある人ならわかると思いますが、自分の価値観を振り返り揺さぶられる、といったような自分の気付きを求められる研修が多いので、今回の研修生は真剣に取り組んだぶん、心理的にづらい部分等もきっとあったのではないかと思います。スケジュールや内容を見ると、自分だったらこれしんどいな～、と感じるコマ割りでもありましたから。でも、それをなんとか上手く消化していたようでもあるので、適応能力とか理解力を備え持った方が集まっていたのかもしれない。

今回の研修の評価から研修生の声を抜粋すると
「HIV/AIDS を自分の問題として考えることができた気がする」
「予防の知識はわかっていたが、普段口にはだせないことだと思っていたので、具体的な知識について他の参加者と話ができて、また皆そうした意識をもっていたことが新鮮だった。」
「HIVを通して、これほど多くのものが見えると思わなかった。様々なスピーカーから具体的な体験や知識などが聞けた事も貴重な学びであったと思う。」
「エイズ対策を考える『きっかけ』『視点』を持つ機会をいただけたことに感謝します」
「他国へ行って、この5日間で学んだことをどんどんいかせるようにがんばってきます」
「自分がこれから取り組むことの大変さを感じますが、一つ一つを自分なりに解決していきたいと思う」
等がありました。

研修生はこれから 2 年間にわたり、派遣国で活動をしていくのですが、また 2 年後に帰ってきたら、ぜひどんな活動をしてきたのか、この研修が少しでも役にたてたか、話を聞いてみたいと思うところですよ。

■「エイズ対策隊員補完研修を見学して」

(財)ジョイセフ(家族計画国際協力財団) 角井 信弘

去る 8 月 16 日から 20 日の 5 日間に渡り、広尾の青年協力隊エイズ対策隊員の補完研修が行われ、その一部を見学させてもらった。

昨年からはまったこの研修、今回は、ぶれいす東京が企画運営を受け持って実施することとなった。5 日間という短い期間にできることは限られている。短いがゆえに何を 5 日間で学んでもらうか、何をプライオリティとするか、そのためにはどういふ人を講師またはファシリテーターとして呼んで、どういふ内容のセッションをどのくらいの時間で、どういふ流れで組んでいくか、さぞ苦労して知恵を絞られたんだろうなあと思像する。全セッションに参加したわけではないが、ワークのやり方や資料の内容など、ぶれいす東京ならではの研修で、小生も大変勉強になった。

3 日目のセッションでは、ピア・サポートおよびスピーカー活動の中心となっている矢島嵩さんのお話を伺うことができた。個人の体験からくる非常に具体的な内容であったので、感銘を受けるとともに、学ぶことが多かった。「自分も守り、相手も守りながら、継続的に活動をしていくためのシステムづくり」の大切さを強調されていた。また、サポートしていく上で「医療に対する不信感を高めないように、あくまでも(患者・陽性者の)コミュニケーションをサポートしていくというスタンスを変えないことが大切」など、これまでの多くの経験からくる含蓄のある言葉を聴くことができてとてもよかった。小生が今後この分野での活動を深めていく上で非常に参考になった。

また、その日の午後、「差別・スティグマとは」と題したワークセッションがあった。はじめに、「自分がもし HIV 陽性者で、職場で働いている場合にどんなことを考えるか」という問いかけに対して、グループに分かれ、自分の感情を表現した。陽性者の手記を読んで、さらにリアルさを加えたうえで感情表現を追加、整理し発表。その後、警視庁 HIV 感染者解雇訴訟の事例を使い、原告の立場と被告の立場に分かれて主張のポイントを整理し発表。そして、HIV 陽性者の生活と就労についての調査結果の提示があり、自分たちのバーチャル感情と実態とのギャップを知り、その上で別の陽性者の手記を読んだ。そして、ディスカッション。参加者はワークの中にどんどん入り込み、自分の素直な感情を開示していった。非常によく練られた流れのワークであった。当事者とのギャップをどうやったら埋めることができるか。結局は〈対話〉〈共感・受容〉〈尊重〉というプロセスを踏む以外にない。だからこそ当事者の参加が大切で、どこかに答えがあるわけではないということに落ちていった。「個人的には、個人の権利を主張する立場に立ちたいと思っても、組織を守るという立場に立ってしまうと、そういう防衛的な思考になってしまう。」ワーク後、一人の参加者がこう発言していたのが印象に残った。ワークをしていたときに、いろんな意見が出てきて、参加者間のグループダイナミクスが働いていたのがとてもよく分かり、素晴らしいワークであった。



▲「振り返りのとき」ハードな 5 日間を省みて

参加者は、今回の研修を通して多様な性の考え方に暴露されるなかで、自分の性に関する価値観を認識し、それを戸惑いながらも表現していった様子が分かった。そして、自分と違う他の価値観に直面したときに、「いろんな角度から考えることができるんだ」というこ

とが理解できたのではないかと思います。それだけで、研修は成功であるといえる。研修を企画運営された方々に心から敬意を表したい。

研修を見学したりしながら、小生もいろいろなことを思い出した。ハワイのワイキキヘルスセンターでインターンをしていた時、セックスワーカーへのアウトリーチプログラムに少々関わった。そのプログラムのディレクターはプロテスタント教会の教職者でもある女性で、ワイキキヘルスセンターとは別に「Home for the Rebirth of Women」という更生プログラムを教会の支援で運営していた。その人にある日、ひょんなことから「セックスワーカーの人たちは、神様を信じることができるのか」という問いをしたことがあった。なぜそういう質問になったのかは覚えていない。その時、彼女は少々ムツとして、でも落ち着きながら「ノブ（小生）と彼女たちとどちらが神様に近いと思う？ 仮にノブは毎週教会に行っていたとしても、それは神様に近いという保障にはなら

ない。彼女たちの中には、日々男たちの暴力に苦しみながら、必死に神様に祈りながら生きている者もいるのよ。」その時、ハッとして、自分がセックスワーカーの人たちに対して差別心を抱いていたことに気がついた。しかも、表面では差別心などないという顔をしながらプログラムに関わっていた。そんな自分が恥ずかしくなった。

これから赴任される協力隊の方々もきっと現場でいろんな壁にあたるのが予想される。価値観の壁、文化の壁、宗教の壁、政治経済の壁、ジェンダーの壁、いろんな壁に当たりながら、現地の人たちと泣いたり、笑ったり、怒ったり、喜んだり、悲しんだり、苦しんだりしながら、いっぱいコミュニケーションして充実した2年間を送られることを願う。自分をより深く知る良い機会にもなり、うらやましくもある。健康が守られることを心から祈っている。

活動報告— 各部門より —

● ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

◆ホットライン・ミーティング他活動状況（ ）は出席人数

7月	16日	東京都電話相談連絡会（5名）
	18日	世話人会（5名） スタッフミーティング（11名） ケースカンファレンス
8月	1日	世話人会（6名）
	13日	東京都電話相談連絡会（4名）
	15日	世話人会（6名） スタッフミーティング（10名） ケースカンファレンス
	30日	東京エイズ相談連絡会 「国際エイズ学会参加者からの報告」（2名）
9月	5日	新人研修オリエンテーション（2名）
	10日	東京都電話相談連絡会（5名）
	19日	世話人会（6名） スタッフミーティング（11名） ケースカンファレンス
	23日	部門内資料整理プロジェクト（4名） 臨時世話人会（4名）

◆相談実績報告

—ぶれいす東京エイズ電話相談—

	7月	8月	9月
日数（日）	4	5	4
総時間（時間）	16	20	16
相談員数（のべ人）	12	15	12
相談件数（件）	28	39	32
うち（男性）	23	31	28
（女性）	5	8	4
（陽性者）	1	0	0
1日平均（件）	7.0	7.8	8.0

—東京都夜間・休日エイズ電話相談（委託）—

	7月	8月	9月
日数（日）	14	13	12
総時間（時間）	42	39	36
相談員数（のべ人）	35	33	29
相談件数（件）	244	259	211
うち（男性）	195	206	165
（女性）	49	53	46
（陽性者）	6	8	3
1日平均（件）	17.4	19.9	17.6

秋になると夏の機会での感染不安相談が急増します。年末の検査を受けられる時期までどうサポートしていくかが例年の課題なのですが、今年は季節に関係なく「数日前の心配な行為」での相談がリアルタイムで寄せられています。相談資源の利用のされ方など、ニーズも大きく変動しているようです。（報告：沢井）

● ぷ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

◆ぷ☆PEPミーティング実施状況

7月	12日	定期ミーティング
8月	16日	定期ミーティング
9月	14日	定期ミーティング

◆その他参加状況

9月	5日	合同新人研修会オリエンテーション（1名）
9月	12日	合同新人研修会（1名）
9月	20日	合同新人研修会（1名）
9月	26日	合同新人研修会（2名）

◆相談メール件数

7月	11件	（女11件）	男0件	不明0件
8月	11件	（女9件）	男0件	不明2件
9月	7件	（女6件）	男1件	不明0件

今回も妊娠に関する相談が多く寄せられた。その中には20代後半

の女性から数件メールが来ていた。POPTTEEN コンドームの付録「Sexual Health News」からここの相談のことを知ったようだった。大人の女性でも性に関する情報へのアクセスがしにくいのかもしれない。こんなご世に、少しでも私たちが役立てればと思う。
(報告：柳田)

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング 参加スタッフ数

(第1木曜 11:00～、第3木曜 18:30～)

7/1	3人	7/14	5人
8/5	4人	8/19	4人
9/2	2人	9/16	4人

◆利用者数

5カ所の病院に通院中、もしくは入院中の16名の方に21名のバディスタッフを派遣

◆訪問先 (2004/9月末現在)

在宅訪問	13件
病室訪問	3件
在宅の電話のみ	1件

◆バディ担当中のスタッフの構成 (9月末現在)

女性11名 男性6名

◆バディの現場から

9月の合同研修の修了者および、事務所での個別研修の修了者が11月3日(祝)のバディワークショップに参加する予定です。これでバディの数が増員されます。また、バディフォローアップトレーニングを12月3日(金)18:30から開催予定です。内容は事例検討、ということで今回は長期にわたり活動が続けるバディから、活動を始めてから、これまでの活動についてクライアントとの関わりについてお話を伺う予定です。ぜひご参加下さい。

また、それに伴い12月の第1週のバディミーティングは、「12/2(木)11:00→12/3(金)16:30～」と変更になりました。お間違えのないようにお願いします。
(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

オープン日数 延べ利用者数 うち新規 ファシリテーターなど*

7月	28日	128名	15名 / 10名
8月	22日	108名	5名 / 8名
9月	25日	120名	10名 / 12名

(*ファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新人 PGM 第18期 (参加者5名)
7/17 7/31 8/21 9/4 (修了)
- ・新人 PGM 第19期 (参加者5名)
9/18 スタート
- ・陰性パートナー・ミーティング
7/10 (6名) 9/11 (2名)
- ・ミドル・ミーティング
7/10 (6名) 9/11 (9名)
- ・グリーフ・ワーク
9/13 (2名)
- ・教師小ミーティング
7/9 (3名)

◆学習会 / イベント

- ・8/7 花火大会 (企画：カップル交流会 参加者：22名)
- ・8/9 ストレス・マネージメント・ワークショップ (参加者5名)

◆ミーティング

() 内は、陽性者メンバーとぶれいす東京スタッフ人数

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
9/9 (4, 5)

- ・新陽性者 PGM 効果評価ミーティング
8/5 (3, 3) 9/10 (3, 3)

- ・新陽性者 PGM の広報を考える会
7/8 (3, 2) 7/27 (3, 2) 8/24 (2, 1)

- ・web NEST 運営委員会
7/16 (2, 2) 8/20 (2, 2) 9/22 (3, 2)

◆花火大会で大輪の花火を鑑賞

8月7日、カップル交流会企画による花火大会鑑賞会がありました。小雨のばらつくあいにくの天気でしたが、22名の方(＋スタッフ3名)が参加。浴衣できめてきた方が何人もいて、まさに日本の夏でした。ゆっくり見たいねということで幹事の人たちが中心となって事前に指定席を確保してくれました。それぞれに飲み物やおつまみを用意して、特等席で次々に打ち上げられる大輪の花火を仰ぎ見るようにして堪能しました。間近でみるナイアガラも迫力100点満点でした。

終了後には交流会もありましたが、大きな大会だけに、並の人出ではなく、交流会会場にたどりつくまでが一苦労だったようです。幹事の皆様、ありがとうございました。なお、10月31日にはハロウィーンをテーマにしたカップル交流会が予定されているそうです。

(報告者：はらだ)

Gay friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

- 7月 9件 (平均1.8件)
- 8月 6件 (平均1.5件)
- 9月 5件 (平均1.25件)

◆Living Together 計画が始まり、さまざまな形で Gay Friends for AIDS が関わっています。詳しくは P6～8 をご覧下さい。
web site : <http://www.living-together.net>

- ・田口弘樹写真展 (8月22日～9月5日)
@ コミュニティセンター akta

- ・「ささやきカフェ」～今だから話したいこと
(8月27日、29日) @ コミュニティセンター akta
ゲスト：長谷川 博史 (JaNP+)、大塚 隆史 (Tac's Knot)

- ・「HIV 感染予防の効果に関する研究」成果発表会
(9月4日) @ コミュニティセンター akta
発表者：市川 誠一 (名古屋市立大学)、生島 嗣

- ・手記リーディングのタベ (9月5日) @ 九州男

- ・LIVING TOGETHER LOUNGE
～ WORDS, MUSIC and GOOD TIME ～
(9月20日、10月17日) @ advocates bar



▲思わず「ファーきれい」の歓声

◆大阪、名古屋、福岡など、ゲイやバイセクシュアルで感染が拡大している地域から、展示や啓発資料の協力依頼が増えています。LAFやMASH大阪への協力もその一環です。

・福岡LAFへの協力
田口弘樹写真展 8月14日～15日

・MASH大阪のイベント「PLUS」(11月20日)
リーディングなどでぐれいす東京も協力予定

◆VOICE04のサイトアップ!

毎週土曜日、多くのボランティアが集い、VOICEの準備が急ピッチで進んでいます。その模様はVOICE04のサイトまで。詳細もこちらをご確認ください。

<http://gf.ptokyo.com/voice04/>

(報告: たかし)

HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績

2004年度7月	8月	9月
電話による相談	- 25 ※	39
対面による相談	- 27 ※	36
E-mailによる相談	-	-
うち新規相談	17	5
		7

ハードディスクのデータが破損したため、正確な数は把握できず。7月の相談件数は電話/対面を合わせて118件。

※8月は参考データ。

◆新規来訪者情報源

医療機関にて情報を得て	5
インターネット	4
他のHIV陽性者から聞いた	3
もともとぐれいす東京を知っていた	2
検査所・保健所にて情報を得て	2
友達の紹介	2
パートナーから聞いて	2
パンフレット	1
雑誌で情報を得て	1
不明	6

◆新規相談者の属性 (N=29)

HIV陽性者	19 (うち女性: 1)
ゲイ・パートナー	5
子供	3
母親	1
夫	1

◆相談内容

薬の資料や情報がほしい/障害年金のことが知りたい/生命保険について知りたい/セーフセックスについて/就職活動で苦戦/転職希望があるが、服薬の開始で不安に/迅速検査で告知され、結果を受け容れられない/告知後の不安がつよい/パートナーのことをみているのがつらい/子供、親、彼氏の感染が判明して混乱等/父親のセクシャリティについて/田舎の役所とのつきあい方/生活のなかのストレスについて/精神的なこころのよりどころを探している/離婚について/医療従事者で感染している場合/薬物と感染/海外から帰国し、その後の日本の生活について/金銭的な問題が同時にある

◆コメント

記録が破損してしまい、正確な統計をとることが難しくなりました。今後、再発防止につとめたいと思います。(報告: 生島)

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

◆「HIV感染予防対策の効果に関する研究」(2003年度一)

7月中旬には6月に引続き研究協力校在籍の10代の学生を対象に、ビデオ「Let's CONDOMing」の啓発効果測定のアナケート調査を実施。8月下旬には(財)日本性教育協会と「性教育のための実践セミナー」を2回開催、好評のうちに終了しました。当セミナーは2005年2月5日(土)6日(日)に連続して開催予定です(詳細はP16のご案内で参照。どうぞふるってご参加下さい。)。また8月から9月にかけて、自治体向けに「若者の性の健康」取組状況調査、各種団体や学会等向けに「性/エイズ教育におけるピア・アプローチの実態とニーズ調査」を実施しました。

◆「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003年度一)

「HIV感染者の療養生活と就労に関する調査研究」の中間報告につき、7月に日本職業リハビリテーション学会で発表を行いました。また、当該調査については、全回答567票の集計をもとにした(最終)報告書及びパンフレットを今後制作のうえ、(財)エイズ予防財団主催・助成の「研究成果発表事業」にて、調査にご協力戴いた全国5ヶ所の拠点病院のご協力を仰ぎ、報告会を各地で開催します(下記研究成果発表会「地域で働く仲間として」ご参照)。

(財)エイズ予防財団主催 研究成果発表会

◆「Living Together—HIV陽性者参加型のMSM予防啓発手法の開発—」

8月22日(日)に新宿にて行われたレインボー祭りの開催に併せ、同時期から数ヶ月にわたり「Living Together」をテーマにした新しい普及啓発の試みを、ぐれいす東京企画・運営にて行いました。具体的には研究成果発表会を中心に、パネル展示・HIV陽性者の手記に触れる場の設定などを通じて、HIV/AIDSに関する研究成果をさまざまな形でさまざまな方々に実感して戴いたものです。

◆「地域で働く仲間として—HIV陽性者の就労支援について—」

福岡、大阪での研究成果発表会開催が決定しました(P16ご参照)。今後、北海道・東京でも同様の発表会を開催の予定です。

1) 福岡: 11月17日(水) 18～20時
国立病院九州医療センター外来棟4階研修センター

2) 大阪: 11月20日(土) 14～16時
国立病院大阪医療センター緊急災害医療棟2階研修室

◆「セクシャルヘルスってナニ? Part2 ケアと予防を見通す戦略—青少年の性の保健行動—」

ICAAP(アジア・太平洋地域エイズ国際会議)の文化芸術部門であるkavcaap2004のイベントの一環として、12月初旬神戸にて、研究成果発表会を開催の予定です。「Living Together展」と銘打ち、厚生労働省委託の研究成果発表を中心に、写真展・手記リーディングなどにより「HIVとすでに共に暮らしている私たち」を実感する試みです。時間など詳細はウェブサイト <http://www.kavcaap.org/> に今後順次掲載予定。参加自由ですのでお近くの方は是非お越しください。

・研究成果発表会: 12月2日(木) 18時～

・田口弘樹写真展: 12月1日(水)～5日(日)

・手記リーディング: 12月5日(日) 15時～18時

場所: 神戸アートビレッジセンター

略称 kavc、神戸市兵庫区新開地5-3-14

TEL: 078-512-5500

(報告者: 吉田)

お知らせ

■ VOICE 04

【日時】11月27日(土) 17:30～(開場) 【場所】四谷区民ホール
【主催】NPO 法人ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS / (財) エイズ
予防財団【協賛】パディ/G-men/サムソン/にじ【協力】劇団フライン
グステージ/スタジオスタッグ/Rainbow Ring/ルミエール



ゲイの間でのHIV感染が深刻さを増している中、一人でも多くのゲイにHIV/AIDSについて考えるきっかけをもって欲しい、それも楽しい雰囲気の中で。観客・出演者・スタッフが同じ空間を共有し楽しむ、発表会スタイルのイベントです。今回は原点である「VOICE」つまり「さまざまな声」がテーマです。お楽しみに！

VOICE04 web サイト <http://gf.ptokyo.com/voice04/>

【出演】パビ江ノビッチ with エンジェルジャスコ&メイリームー/ブルボンヌ/YASUMASA/おわっとう (from 博多) / スキンエコー (合唱) / ディベリティメント (弦楽奏) / 司会: エスマルダ&ベージュ

■「HIV 陽性者の就労支援について」研究成果発表会

HIV 陽性者の就労状況についての調査が、全国5か所の専門病院の協力により実施。567人のHIV陽性者の回答による初の全国調査です(平成15年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 分担研究者: 小西加保留)。この発表会では多彩なゲストによるスピーチもあり、陽性者の就労支援の具体的な方法や取り組みについて考える機会でもあります。発表会は東京と札幌でも開催予定。

【主催】(財) エイズ予防財団【事務局】ぶれいす東京

11月17日(水) 18:00～20:00 国立病院九州医療センターにて
「療養生活と就労に関する調査」より: 研究班メンバー
「HIV 感染症と就労」 山本政弘
(国立病院九州医療センター感染症対策室 医師)
「医療機関における就労支援」 末松由紀 (福岡県派遣カウンセラー)
「障害者雇用枠での就職と職場でのプライバシー」 矢島嵩 (HIV 陽性者の立場から)

11月20日(土) 14:00～16:00 国立病院大阪医療センターにて
「療養生活と就労に関する調査」より: 研究班メンバー
「HIV 感染症と就労」 白阪琢磨 (大阪医療センター医師)
「医療機関における就労支援」 織田幸子 (大阪医療センター看護師)
「勤務先に感染を知らせた経験から」 佐藤幹也 (HIV 陽性者の立場から)
「障害者雇用枠での採用経験から」 (匿名/外資系企業A社/人事担当者)

■ 編集後記 ■

- ・そろそろ鍋の季節。(サトー)
- ・花火大会のことを載せたばかりなのに、もう年明けのミーティングの日程調整をしています。なんと1年が早いこと。(やじま)
- ・最近、i-podをプレゼントされ、音楽を聞きながらプチ引きこもりで歩いています。とてもいいのは、リラックスできること。そして、繁華街の呼び込みの人たちが声をかけてこなくなることです。これってけっこう楽。(いくしま)

■ kavcaap (カブキャップ) 2004

2005年7月に神戸で行われる第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(ICAAP)の文化芸術部門がイベント kavcaap2004 を開催します。テーマは「アートの分野からエイズについての必要な情報とインパクトを伝えること、予防/治療/ケアへの理解と関心を深めること」

web-site <http://www.kavcaap.org>

【日程】12月1日(水)～5日(日)

【場所】神戸アートビレージセンター (KAVC)

〈澤田知子×ブブ・ド・ラ・マドレーヌ対談〉@ギャラリー

12月1日(水) 19:00-21:00 ナビゲーター: 木ノ下智恵子

〈LIVING TOGETHER TALK 1: セクシュアルヘルスってナニ?

part2 ケアと予防を見通す戦略〉@ギャラリー

12月2日(木) 18:00～20:00 研究成果報告: 池上千寿子

〈哲学カフェ@kavcaap セーフアセックスについてのダイアログ〉

12月3日(金) 18:30～21:00 @カフェ

ナビゲーター: 大阪大学臨床哲学研究室

〈エレクトリック・ブランケット2005のためのミーティング〉@ギャラリー

12月4日(土) 17:00～20:00

パネラー 張由紀夫 (akta ディレクター/アーティスト)

田崎英明 (大学・大学院非常勤講師)

〈LIVING TOGETHER TALK 2: 手記リーディング〉

12月5日(日) 15:00～18:00 @カフェ

HIV 陽性者やその家族、友人が書いた手記の朗読会をします。

〈反省会〉12月5日(日) 20:00～ @カフェ

〈LIVING TOGETHER EXHIBITION〉田口弘樹 (写真家) @ギャラリー

〈inside and outside展〉澤田知子 (アーティスト) @ギャラリー

ポートレートと、HIV 陽性者やその家族、友人の手紙を展示。

〈オリジナルポスター展〉@カフェ

■「実践のための性教育セミナー」開催!

学校や地域で性教育に携わっている皆様にご参加いただき、好評をいただいています。(1日のみの参加も可能です)

【日時】2005年2月5日(土)、2月6日(日) 10:00～16:40

【主催・会場】(財) 日本性教育協会 (JASE)

【企画・実施】ぶれいす東京 詳細は <http://www.ptokyo.com/>

■ Living Together Lounge

新しい夕暮れのパartyが始まっています。HIV+の人々、その家族や友人たちが書いた手紙の朗読があったり、アンブラグドライブがあったり…。休日の夕方のGOOD TIMEをいっしょに過ごしませんか。

関連記事はP9。詳細は <http://www.living-together.net>

11月21日(日) 17:00～20:00

music: WARA Live: bwright

12月19日(日) 17:00～20:00

music: WARA Live: シモーヌ深雪 (シャンソン歌手)

編集・発行:ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

【TEL】03-3361-8964 (月～金 12:00～19:00)

【FAX】03-3361-8835

【E-mail】info@ptokyo.com

【ぶれいす東京HP】<http://www.ptokyo.com/>

【Gay Friends for AIDS】<http://gf.ptokyo.com/>

【web NEST】<http://www.jade.dti.ne.jp/~nest/>

【Sexual Health】<http://shw.ptokyo.com>